清流ニューズ

発行所
〒192-0904
八王子市子安町 1-22-25
清流寺
清流ニューズ編集室
電話（042）646-0287（代）
FAX（042）644-1164
http://seiryuji.jpn.org/

令和6年度総祈願

本年度教化誓願達成・学徒・教務員増加
日序上人御廿七回忌・日堯上人五ヶ年報恩ご奉公
寺内・境内整備ご有志奉納推進　工事無事着工
甲乙御講席主・願主増加・共連れ参詣促進・ご奉公体制再構築
お助行御法門聴聞励行・教養会内容充実・役中後継者養成

五月の御総講日

一日　十時　御修行日
七日　十時　バースデー総講
十三日　十時　高祖御命日
十七日　十時　開導御命日
廿五日　十時　門祖御命日
於　清流寺
十六日　十時　開導御逮夜
廿四日　十時　門祖御逮夜
於　羽村別院

特別行事

十二日　十時三十分　開式
佛立第八世講有
当山草創日歓上人御会式

晴天祈願

五日（日）～十一日（土）
第一座　六時～七時半
第二座　九時半～十時半

会議

一日　御総講後　役中会議
四日　御総講後　参事会
廿五日　御総講後　教区長会議

5月12日
10時30分
当山草創 佛立第八世講有日歓上人御会式
奉修導師　当山教務部　本庄序開講師

第八世講有　日歓上人

来る十二日（日）十時三十分より、第八世講有日歓上人の御会式（歓尊会）が、羽村別院にて奉修されます。

第八世日歓上人は、明治廿七年（一八九四）七月一日に第二世講有日聞上人より剃髪をうけ、第四世講有日教上人を師僧として得度されました。

当山は、この日歓上人を、「当山草創」とお敬い申し上げ、羽村別院発足当初の昭和卅八年より、年に一度、羽村別院に於て、報恩謝徳の誠を捧げる志を顕し、歓尊会を奉修させていただいております。

日歓上人は、乗泉寺中興開基（古いお寺を再興）と尊称申し上げております。

当清流寺の本寺（親寺）と申しますが、乗泉寺の歴史は古く、江戸時代から、本門法華宗の一寺院として存在しておりました。

日歓上人は、御歳三十三歳の御時、師僧、日教上人の師命をうけ、乗泉寺住職に就任されました。

ご住職に就任された当時の乗泉寺は、寺とは名ばかりで荒れ放題だったといわれています。

前の住職は逐電（にげてゆくえをくらますこと）してしまい無住状態（住職がいない）状態でしたから、本堂は雨漏りし、畳はボロボロ、勿体なくも内陣には鼠（ネズミ）が出入りし、御尊像のご礼盤は、塔婆で打ちつけ、想像を絶する状態でした。

このような状態の中を、日歓上人は、毎朝三時に起床され、七時迄には一万遍の口唱を重ねられ、旧檀家宅にも一軒一軒ていねいにお助行をされました。

その熱意が、旧檀家にも通じて、〝今度の住職はやる気がある〟朝参詣も、二人、三人と増え、ご利益も盛んに顕われるようになってご弘通が発展していきました。

当時のご利益談をご紹介致しますと、

日歓上人が、或る信者宅にお助行に伺うと、丁度、そのご信者宅に居合わせた親類の人が病気で苦しんでいるのをご覧になり、お折伏して、お題目口唱の御経力を頂きましょう！明日から毎日お助行に参ります。と申され、一週間を区切っての詰め助行が始まりました。

ところが、病状は悪くなるばかりです。それでも日歓上人は、真剣なお助行を続けられました。

五日目は、最悪の状態でしたが、六日目にお助行に伺いますと、ナント昨日迄、苦しんでいた病人さんが、玄関でニコニコして上人をお出迎えしたのです。

事情を聞くと、「昨日お上人がお帰りになった後、身体中の毒物がすべて出切って、おかげ様でスッカリ元気になりました」と話され、日歓上人は、ご宝前に御礼の言上をされたわけですが、「モウうれしゅうて、うれしゅうて涙が止まらなかった！」とご法門でお話し下さったのです。

この現証ご利益によって、ご弘通が、グングンと発展したのです。

五月　朝参詣強調週間

二日～四日
東村山・昭島・西多摩・QLD組

五月の朝参詣強調週間は、五日から歓尊会の晴天祈願が始まりますので、二日から四日まで行われます。

五月二日（木）　東村山教区
三日（金）　昭島教区
四日（土）　西多摩教区　QLD組

右の予定で実施され、各教区の教化誓願必成の為に朝参詣が延長されます。

気候も回復し、清々しい今の陽気は朝参詣には絶好の機会ですので一人でも多く朝参詣に精進いたしましょう。

十二宗名は、門祖日隆聖人が、本門法華経の教えの特徴を十二の角度から名付けられた宗名であります。

「過去宗也、下種也、本門経王宗也、事相宗也、無智宗也、信心宗也、易行宗也、経力宗也、口唱宗也、名字即宗也、教弥実位弥下宗也、直入法華折伏宗也」と仰せられました。

開導聖人は、この十二宗名を重要視され、当宗の御法門の筋道を立てられました。

したがって、当宗のご法門の教えの筋は、この十二宗名の教えを根幹として説かせていただいているのです。

本月は、五番目の「無智宗」を学ばせていただきます。

今月は、**無智宗**の教えを学びます。

先ず、「無智」ということは、末法のお互い凡夫は、仏様の教えを理解する能力が低いということであり、凡夫の智恵をはたらかせず、ひたすらみ仏の教えを求め、み教えに徹するということです。

当宗は、無智宗だからといって、全く知恵はいらないということではありません。凡夫の小智をはたらかさないということであります。

御教歌の「無智なるぞよし」とは、単に愚かになれということではなく、自身の智恵に慢心し、自分考えに執着して、仏祖の教えを軽ろんずる考えを捨てよとの意味です。

「教へのまゝを仰ぐ物故」とは、佛立信者の立場を示されたもので、御経には「信を以て入ることを得たり、己が智分に非ず」と説かれてあります。

御教歌

無智なるぞ　よしといふ也　みほとけの
教へのまゝを　仰ぐ物故

教務部　本庄乗学

この意味は、仏様の十大弟子の中、舎利弗尊者は、智恵第一といわれ、一説には仏様同等の智恵者と尊敬されていましたので、舎利弗尊者は、自分も悟りを開くために、菩薩の六度行の布施行を始めましたが、途中で、己の未熟さに気が付き、仏様の教えをひたすら求める、いわゆる「信」に切り替えて、仏様より成仏のお許しを頂き、「華光如来」の称号を頂くことができたのです。

現代人は、高度の教育を受け、知能もすぐれ、思考力も豊かなため、ともすると仏祖の教えを軽くみやすい傾向があります。

しかし、高度の学識を身につければ、それで人生の幸せは得られるでしょうか。

世界の先進国、文明国家といわれる人々はほんとうに幸せを享受できているのでしょうか。現代文化の恩恵を受けながら、苦悩を背負いながら生きているのが現実です。

智恵がすぐれていても、それだけでは幸せは得られないのです。

勿論、学問を否定するわけではありませんし、多くの学識によって豊かな世界になっていることも事実ですが、学問すると同時に、心の問題も忘れてはならないのです。

お互い三毒強盛の末法の凡夫は、み仏の教えを頂くことにより、迷いの世界から抜け出すことができるのですが、教えをいただくためには、凡夫の小智を捨て去らなければ、み仏の大智、真智をいただくことはできません。

凡智を捨て去る、このことを「無智」というのです。

無智宗の教えは、み仏の教えを聞いて信じて覚える「聞恵」が大切であり、聞いた教えを心に留め、そのご法門を定規として、素直に信行させていただく「信恵」、即ち、信心でおさめた智恵の働きが必要であります。

学者とか智恵者というものは、自分の頭で理解しようとしたいたしますから、とてもみ仏の深遠（奥深く尊い）な法華経の御本意がわからないのです。

しかし、み教えを素直にいただく佛立信者は、その信心修行が、み仏の教えに叶っていますから、法華経の御心、み仏の御心に沿い現当二世のご利益がいただけるのです。

開導聖人御指南

「当流は、物しらず智者の第一信者也、何分に口唱に精出す人が第一也、口唱宗也御利益第一折伏宗也」

「無智宗なれば、有智を捨て無智を直入法花の正機と為す也、舎利弗尊者の智も捨て給えり、況や末代悪世の有智に於てをや」

妙法のご利益を頂くには上行所伝の御題目をお唱えし、凡夫の智恵をはたらかせず、心をからっぽにして口唱信行に励むことが肝要であります。